

寺田寅彦は「津浪と人間」の冒頭で、

「昭和八年三月三日の早朝に、東北日本の太平洋岸に津浪が襲来して、沿岸の小都市村落を片端から薙（な）ぎ倒し洗い流し、そうして多数の人命と多額の財物を奪い去った。明治二十九年六月十五日の同地方に起ったいわゆる「三陸大津波」とほぼ同様な自然現象が、約満三十七年後の今日再び繰返されたのである。」

と述べている。

昭和八年三月三日の早朝を平成23年三月十一日の午後と置き換えれば、今回の東北関東大震災で起きた大津波を書いた文章だと思いに違いない。三陸沿岸地域では、過去にも明治二十九年と昭和八年にも大津波が襲い、災害が起きている。

津浪の恐れのあるのは三陸沿岸だけとは限らない。寛永安政には、太平洋沿岸の各地を襲うような大がかりなものが起きている。学者の方々の警告では、東北関東よりも東海地方の太平洋沿岸の方が地震・津波の恐れが高いとされてきた。

何時また繰返されるのであろうか。その時にはまた日本の多くの大都市が大規模な地震の活動によって将棋倒しに倒される非常時が到来するはずである。それは何時だかは分からないが、来ることは来ると覚悟しなければならぬ。今からその時に備えるのが、何よりも肝要である。今度の東北関東の津浪は、日本全国民にとっても人ごとではないのである。

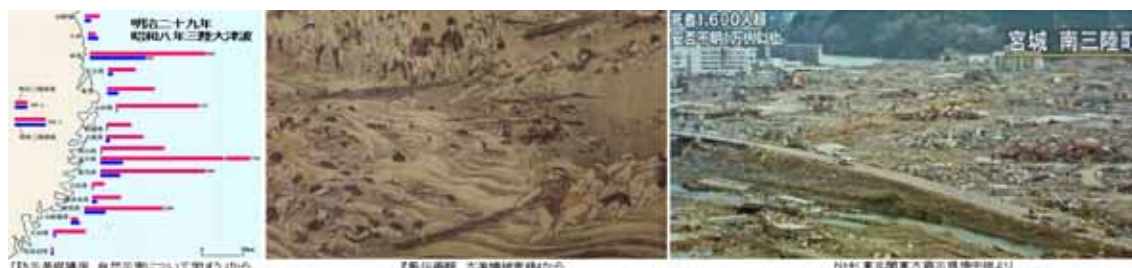
しかも、昭和八年の教訓として築かれた田老の高さ10m、総延長2433mの巨大な防潮堤は、1960年5月23日に発生・来襲したチリ地震津波の被害を最小限に食い止める事に成功し、「田老の巨大防潮堤」として全世界に知れ渡ったが、今回の東北関東大震災による大津波には抗し切れず、ほぼ全域が壊滅状態となってしまった。

では、どうすれば良いのか？

寺田寅彦は「津浪と人間」の中で、

「世界的に有名な地震国の小学校では少なくとも毎年一回ずつ一時間や二時間くらい地震津浪に関する特別講演があっても決して不思議はないであろうと思われる。地震津浪の災害を予防するのはやはり学校で教える「愛国」の精神の具体的な発現方法の中でも最も手近で最も有効なものの一つであろうと思われるのである。」

としている。事実、日頃の防災訓練に励んでいた小中校では中学生が、幼い小学生を労わりながら、訓練を超えた規模の今回の大津波を逃げ切り全員無事だとテレビは伝えている。



< 参照 > 寺田寅彦「津浪と人間」